

スイスはこんな国

サンモリッツ・ルガーノ周辺の“見て・食べ・歩き”

=日本・スイス 国交 150 周年記念に=

(2)

山本 浩(29政経)

7キロのトレックでセガンティーニの足跡たどる

7月10日(木) 昨日は大した歩きとは思わなかったのに左足親指の爪を痛めている。黒ずんでいるので絆創膏を巻いて、これからの歩きに備える。

今日はシルス湖の西端にあって、セガンティーニが晩年の5年を過ごし、三部作の「死」を描いたマローヤ Maloja 1,809m を通って、ヴィコソプレーノ Vicosoprano 1,067m から同じく三部作の「生」を描いたソーリオ Soglio 1,097m (寒い冬季はこちらで過ごした) まで約7km をトレッキングする予定だ。



マローヤ



三部作「死」

出発前に近くの本屋で近隣のマップを2部購入。39CHF (スイスフラン) と結構高い。

バス停のある学校広場 Pl. Schulhaus から8時35分、ポストバスでサンモリッツ駅へ行き、乗り換えて左に美しい湖を見ながら(イン河沿い)西へと進む。西岸にマローヤがあるシルス湖まではまだイン河の名が見られるが、この先には見当たらない。此处がオーストリアを貫流してドイツのパスサウでドナウ河と合流する540kmのイン河上流端ということなのだろうか。

シルス湖のマローヤと逆、東北端のシルスは実存主義の先駆者フリードリッヒ・ニーチェが著作『ツァラトストラはかく語りき』の構想を練った所として知られている。

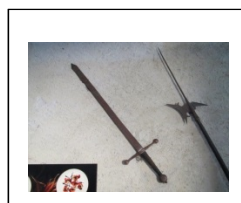
本当はセガンティーニとピツェ夫人の墓があり、少し上にはベルベデーレ(良い眺めの意)という彼が愛した風景のあるマローヤにも寄ってみたかったのだが、バスはマローヤ峠1,815mを越えて九十九折に(さすがにここでは渋滞)高度を下げてブレガリア谷 Val Bregaglia へ入って行く。

10時13分ヴィコソプレーノ着。中世がそのまま残ったような古びた家と狭い道の集落。バス停前の家の壁にはスグラフィットの素朴な人形絵とロマンシュ語があるが、意味は判らない。扉が開いていたので中を覗いてみたら、中世の騎士のものが錆びた剣と鎧が壁にかかっていた。

校倉造のような家の間を歩いてマイラ川 Maira を渡る。頑丈な石造りの太鼓橋で、これは撮っておきたくなる代物だ。



スグラフィットにロマンシュ語



壁に剣と槍が



古い石の橋

橋の袂で身支度をして山腹へ向けて登り、やがて川と平行に緩やかな登りを続ける。左斜面には牧草地が広がり、冬に備えて刈り取り作業をしている人がいる。

ブレガリア谷を隔てた3,000m級の針峰群は曇り空のため、頂上付近がハッキリしないが、これらの峰々はシオーラ山群に続いてボンダスカ氷河を挟み、スイスアルプス6大北壁に数えられるピ

ツツバディーレ Piz Badile 3,308m がある筈だ。バディーレとはシャベルのことで、特徴的な台形をしているから天気さえよければ見落とすことはないのに、一寸この天気が恨めしい。

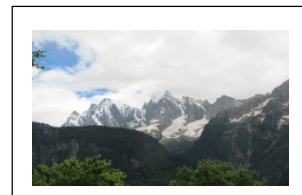
この道は木材運搬のために整備された道路のようで、大型の材木運搬車が道一杯を使って通るので何度もこれを避けるのが大変だった。



材木運搬車



ドゥルベギア



ブレガリアの山々

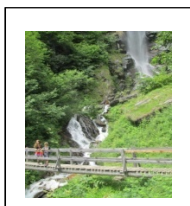
11 時 55 分にドゥルベギア Durbegia 1,410m 着。木を組んだ張り出し（テラス）の上にテーブルを並べた簡易レストラン、此処で昼食を取ることにする。

お勧めはご当地料理の「大麦のスープ Bündner Gerustensuppe（細かく切った日干し野菜とベーコンやフライシュと麦をじっくり煮込んだ冬の定番料理）」と「山のチーズ Bergkäse aus Vicosoprano」。ブレガリアの山々を見ながら明るいパラソルの下で取る食事は大変楽しかった。

ソーリオの美しさ、家並みに感動

12 時 35 分発。少し登った所に運搬車が回転出来る広場を持った木材集積所があり、楽な道は此処まで。これから先は山道になる。然し、上りはもうこの辺で終わりかと思っていたが、更に登って最高地点 1,475m からやっと緩やかな下りに入り、パロン Parlonth でスタンパ Stampa への道を分けて進む。

日本のウツボグサやマツムシソウなど花の写真を撮りながら歩いていたら、小学生位の姉弟が勢いよく追い抜いて行った。2人だけで来た訳ではあるまいと思ったら、やがて後ろからお母さん、子供たちは先に行っては休んで待っている。このコースで最も立派な滝のある橋で2人の写真を撮ってあげた。



滝と少年少女



一望のブレガリア谷



プロモントーニュ



ソーリオが見えた

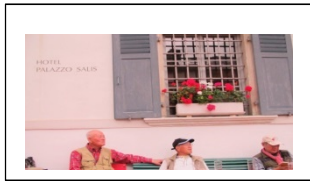
少し先に進んで振り返ると、長く伸びるブレガリア谷が一望に見下ろせる。美しい眺めだ。

真下にプロモントーニュ Promontogno 821m の集落が見えてきた。あそこまで下りるには未だ大分掛かりそうだと思っていたら、いきなり前方にソーリオ Soglio 1,097m の教会の塔が見えた。ソーリオの方が、100m 以上標高が高かった訳で何も悩むことはなかった。

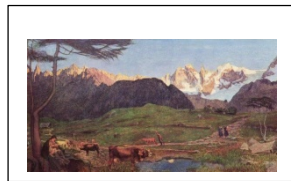
村の入り口であの子供たちのお父さんがやってきた。家族4人でそれぞれがハイキングを楽しんだのだろう。

実は我々も似たようなもので、迷うことのない一本道だったので先行組と後続組ではかなりの時

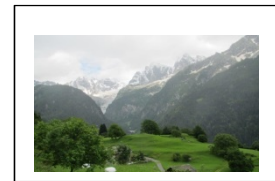
間差、素朴な佇まいの家の建つ石畳の小道を抜けて村の中心のホテル・レストラン「パラッツォ・サリス」に着いた時には、先着組はほぼビールを飲み終えていた。



パラッツォ・サリス



三部作「生」



「生」のサイトか？

この建物はホテルになっているが、サリス家代々の貴重な歴史遺産であるらしい。

ソーリオはセガンティーニが「楽園への入り口 la soglia del Paradiso」と表現し、その夕映えの美しい景色が彼の三部作「生」を生んだ地で、ヘッセやリルケが愛し、新田次郎も彼の著書『アルプスの谷 アルプスの村』で「おそらくこれほど美しいものは何所へ行っても見られないだろうと私は思う」と絶賛している。

あまり時間はなかったが近くのインフォメーションで聞いて、村はずれのセガンティーニが「生」を描いたサイトと思しき所を訪ねてみた。伸びやかなブレガリアの自然と時の流れから取り残されたような石葺きの家並みが寄り添うソーリオは、深く心に染み入る感動を与えてくれる。

また、ソーリオはヨーロッパ最大級の栗林があることでも知られており、本当はこんな所でゆっくり時間を過ごしたいものと思いながらポストバスで谷底のプロモンテニューヘ下り、サンモリッツ行のバスを待つ。マロンケーキが有名なブレガリアホテル前のバス停は池と花で美しく飾られていた。



インフォメーション



ソーリオの家並み



ブレガリアホテル前

赤い列車ベルニナ急行に乗る

7月11日(金) 5時半起床、雨、これでは今日の予定のコルヴァッチ展望台～ポントレジーナは無理と予定変更。オスピッツォ・ベルニナ～アルプグリユムのトレッキングをすることにした。

志波ガイドがこの選択をしてくれたことは大正解。やはりコルヴァッチは雨で、ベルニナ急行で少し南下した我等は大して雨にも関わらず楽しむことが出来た。

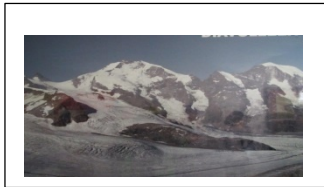
学校広場からポストバスでポントレジーナ駅 Pontresina 1,774m へ行き、赤い列車、ベルニナ急行 Bernina Express に乗る。トゥズイスからサンモリッツを経てイタリアのティラーノに至る122.3km のレーティッシュ鉄道アルブラ/ベルニナ線は周辺の景観と合わせて2008年の夏、世界文化遺産に登録されている。レーティッシュという名前はその昔、この地域だけに住んでいた先住民ラエティアからきているらしい。

重要な鉄道路線である筈のチューリッヒからサンモリッツへの直通がなく、必ずクールで乗り換えねばならないのはレーティッシュ鉄道がスイス連邦標準軌の1.435m幅ではなく、敷設の困難な

山岳地帯であるため 1.0m 幅軌の単線とせざるを得なかったからである。

ランドヴァッサー橋で有名なアルブラ線より 6 年遅れの 1910 年に完成したベルニナ線は通常レール(アプト式等でなく)ではヨーロッパ最高所を走る鉄道で、今日の我等の出発点は正にその最高点オスピッツォ・ベルニナ Ospizo Bernina 2,253m である。

ポントレジーナからベルニナの谷へ向かって上り勾配になるとすぐ右手にグラウビュンデン州最大のモルテラッチ氷河 Vadret da Morteratsch が迫ってくる。



モルテラッチ氷河



オスピッツォ・ベルニナ



ラーゴ・ビアンコ

右左にカーヴしながら高度を上げ、3 日後に来る予定のディアヴォレッツアを過ぎると小さな黒い湖レイ・ネイル Lej Nair に続いてこのルートのハイライト、白い湖ラーゴ・ビアンコ Lago Bianco が現れる。ロマンシュ語のレイ・ネイルとイタリア語のラーゴ・ビアンコは言語の境界であると共に、南にポー川を経てアドリア海(地中海)と北ヘイン川、ドナウ川を経て黒海への分水界でもある。

ラーゴ・ビアンコは水力発電のために造られた人造湖だが、カンブレナ氷河が削った岩石等多くのミネラル分が流れ込んでいるために青白く濁っており、その神秘的な色はターコイズ(トルコ石)に例えられている。

湖の対岸にピツカンブレナ Piz Cambrena 3,602m の山並みを見ながら暫く進むと、頑丈な石造りの駅舎のオスピッツォ・ベルニナ到着である。この鉄道の名前の元であり、16 世紀からイタリアとの通商の際ヴェネツィアへの最短ルートとして重要であったベルニナ峠 Passo del Bernina 2,359m は駅の左奥山側にあるが、そちらへは行かず湖に沿って東南方へ歩き出す。

道端のアルプス名花に慰められ

山側から線路を渡って湖との間を歩くので、何回かベルニナ急行の赤い列車に遭遇する。湖は広々と白濁一色で魚影は勿論、鳥も全く見かけない。

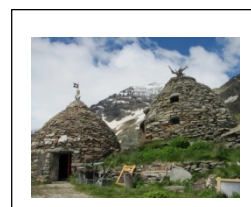
30 分ほど歩いて湖の南端にあるダム堰堤下 2,222m に到着。冷たい風を避けて小屋蔭で身支度を整え、サッサルマソンへの登りに備える。



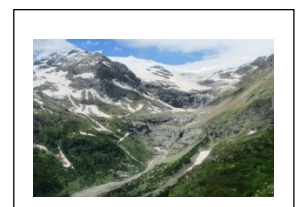
サッサルマソンへ登る



エンツィアン



サッサルマソン



パリュ氷河

山腹に付けられたこの道は真っ直ぐ長く続くので、130m の標高差ながら結構キツイ。道端に咲くアルプス名花の大型エンツィアンやアネモネに慰められ、喘ぎながら登り詰めて最後に右へ廻り

込んだ所がサッサルマソン BergHotel SassalMasone 2,355m だった。

休憩する前に左前方を見ると雄大な眺めが開けている。ピッツパリュ Pitz Palü 3,905m とピッツヴァルナ Piz Varuna 3,453m の間から流れ出るパリュ氷河の大迫力、真下には小振りながら青く美しいパリュ湖、眼を左にやるとこれから行くアルプグリユム駅とその先で急激に高度を下げるループのために3本になって見える鉄路、さらにその奥にはイタリアに近いポスキアーヴォ湖が見て取れる。

30分ほど眺望を楽しんで下山開始。草付きのジグザグ道を下っていくと、アルペンローゼが随分多いのに驚いた。多分カール状に囲まれたこの地形が気に入っているのだろう。

一旦下りてから何人かはループを走る列車の写真を撮るために少し高台にあるホテル・レストラン・ベルベデーレへ登って行ったが、こっちはその元気がなくアルプグリユム駅 AlpGrüm 2,091m へ向かう。

石造りの駅舎の壁には木製の標識「アルプグリユム駅、箱根登山鉄道姉妹鉄道提携5周年記念、1986年6月寄贈」が架かっている。なんでも箱根登山鉄道はベルニナ線をモデルに造られたとかで、主要駅には片仮名で駅名を書いた同じ木製の標識が掲げられていた。後で調べたところ、箱根登山鉄道は当初アプト式歯軌条鉄道で申請していたが、ベルニナ鉄道が高低差1,824mを通常のレールを使った粘着式鉄道で運行していることを知って急遽変更申請し、景勝地を生かすための曲線の多用などを参考にして実現したとのことである。



アルプグリユム駅



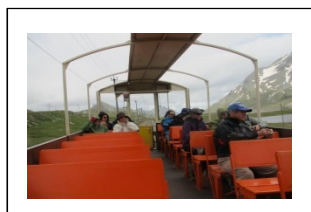
木製片仮名標識



湖畔のベルニナ急行

13時15分、駅中のレストラン AlbergoRistorante で遅い昼食。今日のビールは EdelbreuKübel、パスタはカルボナーラにした。

15時04分の列車でポントレジーナへ向かう。最後尾に無蓋車が連結されていて、元気な桑原、水澤両氏が出かけて行ったので、負けじと最後尾へ渡ってみたものの、ベンチのような椅子に座ってみると成程開けっぴろげで爽快ではあるが寒いなの、ヤッケのフードも被って暫く我慢したが10分ほどで退散した。



寒い無蓋車



ポントレジーナの通り

今日と明日の泊まりはポントレジーナ Pontresina 1,805m。イン河の支流、駅前の川フラーツ Flaz を渡った所に細長くローカル色豊かな街並みが続いている。駅から歩くと15分位はかかりそうなので、お馴染みのポストバスで街の取っ掛かりまで行くことにする。

スポーツホテル・ポントレジーナ SportsHotel Pontrejina は目抜きのみストラ通り Via

Maistra の中ほど山側に面していて、4階の窓から眺めるとロゼック谷 ValRoseg を挟んでムオッタス Muottas の山々に映える夕焼けが美しい。明日は初めての好天が期待できそうだ。

ホテルの夕食には我々グループ「Tenkei」のメニューがプリントされていた。

落ち着いて食事を楽しんだ後、明日のトレッキングの話になった。今回の旅の最高所コルヴァッチ展望台の後、フォルクラスールレイ峠からロゼックの谷へ向けて標高差 756m の急坂を一気に下る道は大きな段差や急斜面に要注意、と案内書は呼びかけている。

実は2日前から痛めていた左足親指の爪はバンドエイドで抑えてはいるものの何時剥がれてもおかしくない状態になっていて、下り歩きでかかる負荷が最も気になるところだ。次の日のセガンティーニヒュッテへは何としても登りたいので、明日は自重して 756m の下りは諦めるべきか、決めきれないままベッドインした。